

## 盤梯山火山現状報告(第二報 昭和七年八月提出)

### 福島測候所報告(同所技手柳谷喜太郎調査)

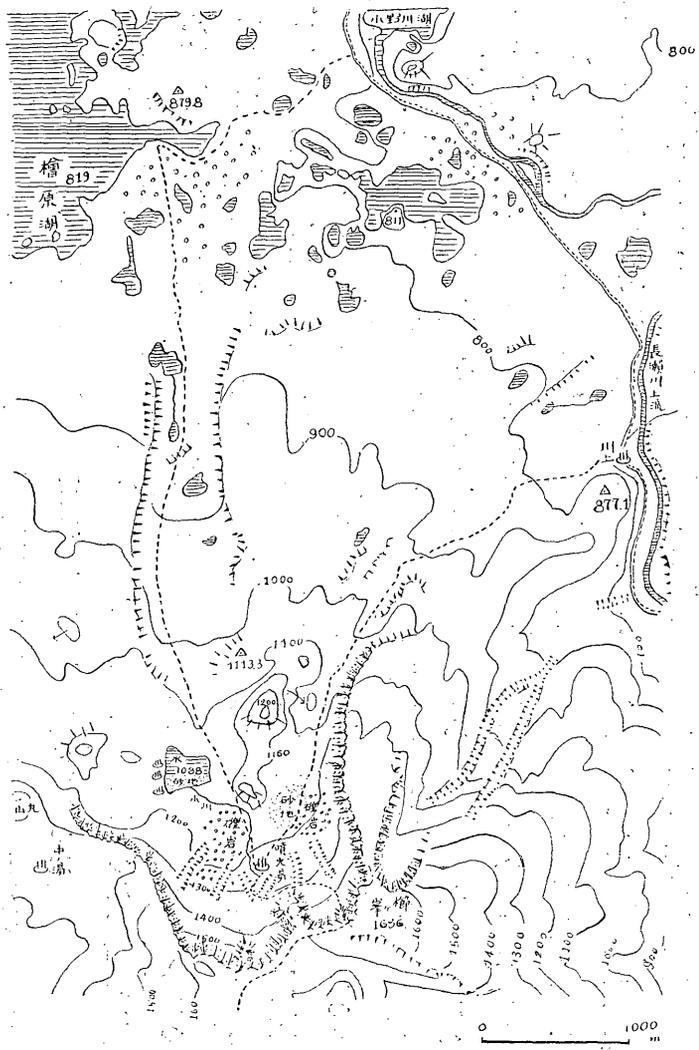
昭和六年八月報告のものは主に舊噴火口及その附近の状況を報告したもので、新噴火口即ち明治二十一年七月十五日のものに就いては詳述しなかつた故、昭和七年八月七、八兩日此の方面調査のため登山、この状況を纏めたものを第二報とした。

#### 噴火壁の現状

此の噴火口は第一報でも述べた様に小磐梯の大部、櫛ヶ峰の半廓及此の二つを連らねる鞍状部の全部を含むもので、南壁は舊噴火壁に接し西壁は小磐梯の東一角より成り、東壁は櫛ヶ峰の西半廓を占め北は泥岩流出道に續き遠く檜原湖、小野川湖、吾妻湖方面に向つて傾斜した所謂馬蹄の形を有して居るが噴火口とも見らるゝ界は北方で恐らく海拔一〇八八米で示す、沼の北部迄を占めた以南一帯であらう。

然しこの噴火型式は破裂噴火で周圍に溶岩流出が殆んどなかつた様に、恐らく大同元年及それ以前の噴火も多く、此の式の爆發をなしたらしく、多分當時の噴出物の堆積したものが新噴火壁となつて居るのであらう、従てこの周壁も多くは流出溶岩質でなく飛散した火山岩、火山彈、火山礫、火山灰の堆

積による脆ろい地質をなして居るし風化、浸蝕、崩壊による破壊作用は實に大きく殆んど全壁に互つて



起りつゝあることは特に注意される。

例へば昨年六月二十六日長雨のため櫛ヶ峰の中腹に當る一帯が大音響と共に崩壊し、地元村民をして磐梯鳴動等と不安に陥らせたこともあり、又七日夜噴火底内噴火温泉に投宿した夜、一時並程度の降雨のためもあらうが土塊崩壊の響き、小川に押出される石塊の音等度々であつた。

登山道として舊噴火口沼之平（第一報參照）を過ぎ稍急な岩石道を登ぼりつめた所は新噴火壁の南側で以前の小磐梯と櫛ヶ峰略中部鞍状間の南側を占め、東西兩壁に比べると可成り低く、なつて居るが登山道に接するだけ最も注意される所である、その壁は上方で多く火山灰質で所々岩石を混じ下方では岩石の間を火山灰の埋合はせた地質であるが後に述べる噴煙の箇所（寫真第三）より下は崩壊岩石で埋立てられ噴火湯（地圖參照）附近迄岩石傾斜帯となり噴火縁より底に通ずる通路の一部分となつて居るが相當険しい道である、寫真第一第二は登山道鞍状部より噴火壁上部全廓及北方裏磐梯を望むもので、寫真第一中左に高かく聳えるのは天狗岩、その右に連らなるものは前述小磐梯の西一部として残つたものであり、第二は東側上壁及泥岩流出道を経て遠く松原湖小野川湖を望むもので、右に聳える櫛ヶ峰の右方は直ちに舊噴火壁となり、沼ノ平に續いて居る（第一報寫真三、四參照）然かもこの峰は小磐梯の西一角側と共に噴火壁中最も高かくいづれも北方に向つて徐々低く、なつて居る、櫛ヶ峰前方で寫真上、是と略平行に黒色をなした部分は櫛ヶ峰と天狗岩の中間鞍状部で縁の遙か北方に入り込んだ部分で之は壁中でも最も緩やかな傾斜帯をなし、磐梯登山道から噴火底に降だるにはこの東側を通り、この緩やかな傾斜

帯を過ぎ更に前述の噴煙下の岩石傾斜帯を降たることになつて居るが。それでもなか／＼の險路で壁中幾筋もの浸蝕溝が深かく中腹を走り(寫眞第三參照)その間、道は右往左往、所々石礫集塊して居るので噴火湯に達するには普通四十分位かゝるだらう。この地には壁中登降し得る場所は殆んど見付からない程いづれも未だ斷崖をなして居る、然し前述の様に壁は多く疎鬆質で寫眞でも頷づかれる様に至る所に崩壞浸蝕あり。寫眞第二の中央部及第四は、昨年六月二十六日の大崩壞後尙之を續けつゝある状態を示して居るし、舊爆發の幾回かの噴出又は異成分の堆積によつて出來たであらう、幾筋かの層理も明らかに示されて居る、然しこの東壁を更に北に進んで末端近くに達すると壁の中部は頗る硬質でこの部分だけは直接外氣に觸れることなく凝固しただらうと思はれる溶岩質帯である。従てこの部分だけは風化浸蝕作用も割に行はれず、噴火當時底と壁との界は深い割目となつて存在したとのことであるが、今も尙その溝をかなり深かくとめて居る。

#### 噴口底及泥岩流出通路の狀況

噴火底及泥岩流出の狀態は寫眞第三、四、五で示されその底と見らるゝ海拔一〇八八米の沼以南の一帶は大體廣い平地をなして居るが、沼の北東部から走しる丘陵は南方に伸びて沼の東部に迫り、又一方噴火湯の西部には周壁近くから續く臺地あり、兩者接近して底を輕ろく二平地に分けて居る。此の東方の部分で壁近くは一帶に崩壞岩礫で埋まり、北側の丘に接した部分も礫帯となつて居るが、内部一帶は

幾分水分を含んだ軟かい砂地で極く平らな平地となつて居る(寫眞第四、五參照)又一方西方部分は現在沼となつて居るもので相當の廣さを占め、水は赤褐色の濁つたもので沼の北半面にだけ水をとどめて居るが降雨の寡多によつて水量は常に變化あるとの事である。この水の涸れてある部分は一帯に砂地で、北側の水のある部分は泥土から成り、水源は主に噴火壁の南東部から發し噴火湯のすぐ北側を通る小川で前述兩丘の間を北西に折れて沼に注ぎ、常には大した水量もないが脆ろい岩石砂帶を通るため運搬浸蝕作用等内部變化には可成り大きな役割をなし、噴火湯の北部迄大小の礫岩を運搬堆積して居るし、豪雨の時等この附近には可成り大きな變化を與へる模様である。

以上述べた噴火底の中、低地帯はまだ全然草木が生じて居ない(寫眞第四、五)之は多く砂地であるためもあらうが、この附近にはまだ多量の硫化物等を含んだ水分の流れ込むためでもあらうと思ふ。然し幾分丘となる部分には所々雜草生ひ松は最も多く、樹齡の拾五年位に達して居るものもあるが多くは現在發生しつゝある小さいものである。

更に此處より北、泥岩流出の區域は頗る廣汎に互るため、この状態を詳述することは出来ないが、通路附近の大略を述べると火口近くの北方では稍灰褐色を帯びた土壤に大小の岩石、岩層入亂だれて存在し、地形、岩石共突兀たる形に近いが北へ降たるにつれて共に幾分宛なめらかさも加はり、岩石は硬質のもの多く岩屑質のものは稀になり、土壤も次第に濕氣を帯びて肥沃となり、沼の點在する附近(地圖

參照)からは殆んど泥岩流出の跡とも見えず、所々岩石の露出して居る外普通の山野を歩むに異らない、然し更に檜原湖岸に至ると大塊の岩石累々と湖岸を包み、流出岩石のこの方面に多く集まつた状態をなして居るが、恐らく土砂は湖水に洗ひ取られ大塊の岩石のみ残つたものであらう。然して、以上述べた檜原湖迄の流出帯も決して坦々たるものでなく地圖上及寫真二、五からも領づかれる様に山あり谷あり盆地あり斷崖ありて頗る變化に富んで居る。

草木發生状態を見るに噴火口近くでは、前述の様に至つて疎らではあるが北方に降だるにつけて次第に繋げくなり北方の凹地では葦の二米にも達し見透しの付かない所など方々にある。然しその種類は一般に限られてあるらしく草の大部分は葦でその外イタドリ等二、三種のもの著しく灌木としては川原ウツギ最も多く樹木では松、柳、白樺、榛木等であるが中、松はその大部分を占め遠望では全くの松林と思はれるし、いづれも湖水近くで大樹となつて居る。松樹齡は大なるもので二十五年前後然も發生當時最も早かつたのは松でその後所々川原ウツギ發生しつゝあつたとのことであるから、發生の順序は噴火後二十年前後を経て湖邊に著しく松を生じ火口近くへと次々に生じたものであらうし、その後生へた他の草木も大體之に準じたものらし。

更に松原湖より東、小野川湖附近に至る道筋は所々岩石を見る外普通の山野に異らないが、それより川に沿ふ道筋で略吾妻湖を東に望む方面迄は道路の附近には經二米に餘る大岩石(いづれも丸味を帯び

た硬質のもの)が累々と一帯をなして各所に存在し、斯くも大塊のこの方面迄流出したものと驚かされる。それより川上温泉を過ぎ長坂三ツ屋方面迄泥土流出の道筋は現在の長瀬川に沿ふて押し込んだらしいが、當時泥土の押し寄せて川の向ふ岸を洗つたと思はるゝ箇所は未だに斷崖となつて各所に見受けられる、之等流域に沿ふた流出帯は多く平地をなし、今では大部分稻田となつて居るが、その他の部分は若い潤葉樹發生し流出箇所と他の部分とでは樹木發生状態から、尙はつきりと區別することが出来る。

#### 噴煙及温泉狀況

噴煙は噴火當時の旺盛であつたのに較べて急激な減少でわづかに寫眞第二、及第三等に示す一小部分に過ぎない、寫眞第三の示すものは登山道に接する壁の中腹にあるだけ登山者には最も注意を受けるものであるが、更に噴火底から接近して見ると見かけ上よりは、尙一層廣ろくその面積は恐らく拾坪にも餘るであらうし、噴煙の強さもより甚だしい内部に立入ることが出来なかつたが、湯花は此處から採集するとのことであるから、單なる水蒸氣でなく硫化物その他多くの化合物を含んだ蒸氣であらう、此の外噴火湯温泉近くにも噴煙の所二、三あるが極く微弱なものに過ぎない。

今一箇所は寫眞第二〇に示す様に周壁東側で海拔一〇八八米の沼の上方にある、此處は噴煙としては相當廣範圍を占め、大小を細かく調べるとその箇所は五、六十にも當つて居る、その大部は噴煙弱いた

め遠くからは望まれないが、寫眞に見える三ヶ所は場所も相當廣く勢力も頗る強い、中、北方にあるものは温泉湧出の場所で、近く是を松原湖迄管で導びき温泉場設置の豫定にあり、既に湧出口は工事も出來した由であつたが時間の關係上實見することを得なかつた、その南方二ヶ所は只噴煙のみであるが、その力は物凄い位に一種のうなりを生じ、中間のものは殊に甚だしく噴煙面積も長さ上下に約一八米幅下方で二米、上方で四米位を有して居る、その噴煙口内の温度は九十六度〇分と觀測した。(測温方法二百度目盛り的高度寒暖計を用ひ温度の急變を防ぐため、ガーゼ二拾枚を重ねて水銀球部を包み、長さ五尺位の棒の一端に寒暖計を結びつけ噴煙口内に十分以上挿入し二回觀測)。併して此處一帶の噴煙は噴出の末期ともなつたのであらうか、前述鞍狀部の噴煙と異なり、殆んど硫化物その他の化合物も含んで居ないらしく、臭氣もなく、噴出口附近の岩石にも大して結晶物をとめて居ない、多分大部分水蒸氣だけであらう、以上の外には底内にも又東周壁にも噴氣孔は見當らない。

温泉は噴火底一(地圖及寫眞第三參照)に一ヶ所二軒の温泉宿で噴火湯といつて居る、湧出量は年々殆んど變化なく、寧ろ幾分増加の傾向ありとのことであり、温泉温度は湧出口二ヶ所で九十四度五分及九十五度〇分平均九十四度八分である。

この外西周壁末端近くの中ノ湯(地圖參照)は湧出口で温度九十一度〇分、湧出量は幾分宛減少の傾向がある由、尙その東方で噴火壁近くにも上ノ湯温泉があつた由であるが、噴火壁崩壊のため拾數年既

に湧出もとまつた由である。又東周壁を北東に延長した地點にも川上温泉がある（地圖參照）。之は遠く鎌倉時代開湯した由であるが、その後閉鎖のまゝとなり、明治廿一年噴火に際して又湧出し當時より數年間は温度も頗る高かつた由であつたが、その後は次第に低溫となり、八月八日現在で漸やく三十一度六分火力を以て入浴する有様である。

尙川上温泉主及狩獵を副業とする人に就いて、噴火當時の狀況を聽くに噴火當時先づ現在の噴火壁となる部分は大音響と共に大きな割目を生じ、猛烈なる勢で噴煙しつゝ數度に亘つて大音響と共に地震あり、見る／＼現在噴火底となる部分の山塊は砂山の崩れる様になだれを打つて流出した由であるが、同時に危険を知り約四町の道を逃げのびる中早くも泥流に襲れたとの事である、從て噴火口地點から川上温泉迄を約二十五町と見れば人間走速の約六倍強の速さであり、一寸我々の想像し得ぬ怪速力となる、當時この流出區域の多くには亭々と伸びた樺、朴ノ木、トゲ、栓の木等老樹鬱蒼と茂り特に樺は最も多かつたとの事であるが一瞬にして荒野となり、附近只一本の立木を見たとの事である。從てこの廣範圍に互り、殆んど例外なく泥土に見舞はれたと言ひ得るし、當時この方面には多くの鳥獸棲息し、殊に野兎に於いて甚だしかつたとの事であるが、噴火前二、三日全く姿を消したとの事である。從て是から見るとその頃早くて地變の兆候のあつたものと見られる。